

「荒事」から「和事」に至れ

－大阪大会での木津川計先生の基調講演

永山 誠

*紅葉の先に青い奈良京のある山波をみる

これまでの大阪のイメージとは異なり、2018年日本福祉文化学会大阪大会が開催された桃山学院大学は、丘陵の自然を生かした広葉樹豊かな開放感のあるキャンパスでした。奈良京の方向の青みを帯びたなだらかな山波が色づいた紅葉の間からみえます。この穏やかな風景を飛鳥や奈良の時代の人びともみていたのでしょうか。

大会初日の10月27日、基調講演は木津川計立命館大学名誉教授で「語りのなにわ文化－江戸となにわ文化の違いを中心に－」です。以前放送大学で類似の講義をTVで見た覚えがありました。

講演内容について印象に残ったことを記しておきます。

*地域のいろどりを直接反映する「語り」

『語り』という<ことば>を通じて「なにわ文化」の特徴を考える講演でした。なにわの『語り』の特徴を生み出す要因を、土地の成り立ち、人口構造、職業構成、産業構成、都市のつくり、生活等を例に地域社会の「いろどり」に着目し、これらの要因が『語り』の特性を形づくるという話です。いわば地域特性が、話ことば、しぐさ、人の「いろどり」を生み出すということです。上方芸能はこうした要素によってかたちづけられたという。

とくに印象深かったのは、ことばやしぐさ、つまり地域文化は、歴史、社会、生活等の地域特性と間接的・媒介的ではなく、逆に<直接結びついている>と講演者は理解しており、『語り』の特徴を文化の視点で分析しました。福祉の実態に対する文化の視点からの観察、批判と同じ視点です。

福祉（例えば地域福祉）でいえば、地域の歴史、人口、職業、産業、生活、金融財政政策、地方自治等とどう関わっているかを観察して理解することが求められていると感じました。

福祉を理解する場合、たんに福祉サービスの不足や欠点を発見することが必要ですが、これを出発点になぜ不足や欠点が生まれるのかを問いなさい、ということです。福祉の「見方」について大きな示唆をもらいました。

*土地の表現者は「語り（音）」

おもしろかったのは、地域の文化の違いを音や『語り』で理解している。京都は「はひふへほ」、大阪は「ばびふべぼ」、神戸は「バビプペポ」という具合です。全国大会直後の『朝日新聞』2018年11月10日付「折々のことば」の欄で鷺田清一は、地域を「はひふへほ」

等で表現した「雑誌編集者もいた。音調が三都の気風をびたり伝える。他の都市も音で知りたい」と短文のなかで紹介・評論していました。偶然のタイミングでしょうが、雑誌編集者とはもちろん『上方芸能』編集長だった講演者です。

「水戸ッポ」「土佐ッポ」という「土地の気質」をあらわす言葉があります。「水戸ッポ」気質は、常陸の国の那珂湊、磯浜周辺の住民気質が源流でここから関東に波及したそうです。源流の土地柄は那珂川、涸沼川の河口で古代からの河川・海上交通の要衝の一つで、東北、江戸、上方を結ぶ物流拠点だった土地です。「土佐ッポ」は「水戸ッポ」と気質に類似性が多いといえます。ただ「土佐ッポ」といっても高知県四万十川河口旧中村市だけは「はひふへほ」が残り、柔和な気質が継承されています。20世紀末共同研究者であった言語研究者から『語り（方言）』の調査から人の移動や生活の歴史を読み取る方法を教えられ、感心したものです。福祉もこれに準じます。

*江戸と上方の「語り」の違いから大会で思ったこと

私の理解で講演者の考え方の骨格は、江戸と大阪との対比で文化の特性を示したことです。講演者によれば、江戸は「警護都市・武士中心・もののふぶり＝荒事（あらごと）」で、大阪は「平和都市・町人中心・たおやめぶり＝和事（わごと）」です。これには感心しました。私にとっては極めて重要な指摘だと感じました。つまり江戸は武士力にたよる権威主義的なタテ社会で、大阪は商売がやれるよう平和でやわらかな「ヨコ社会」ということです。

2018年度福祉文化実践学会賞受賞者は、サリドマイド被害者生活支援活動を55年間取り組んできた公益財団法人「いしずえ」の活動に関わった6名の会員でした。代表者の佐藤嗣道さんによると、被害者救済裁判の被告であった製薬会社は、「いしずえ」の創設だけでなく、今も協力関係にあるといえます。これは「荒事」ではなく「和事」です。国民と企業とのあいだで「和事」を実際につくれることの証しです。さらにトヨタの協力で障害者用自動車の開発もなされました。これも「和事」で福祉文化への寄与です。

静岡の平田会員（東海ブロック担当）はトヨタ財団からの研究費により長年課題ごとの調査研究を実施し報告書をまとめてきましたが、平田さんはこれを地域福祉の実践に継続して活用しています。1970年代から経団連を中心に「1パーセント運動」（『社会貢献白書』の創刊）がはじまりますが、この運動を背景に国民と企業の「和事」の関係が広がり継続しています。

1999年だったでしょうか本学会第10回大会高知大会（県立高知女子大学）で「福祉と技術」というタイトルでシンポジウムを企画し、高知工科大学でのロボット開発研究と地元の近森病院のテクニカルエイドセンター（当時）における福祉機器改良・開発現場の報告をもとに、福祉と技術の協力関係を作り上げる必要性を討議しました。

これらの事例から福祉の発展は、生活者（国民）と企業の「和事」で向き合う関係をつくり上げることが社会的に必要であり、しかも実際に可能であることがわかります。

生活者（国民）と企業という両者の「和事」の関係づくりを調べてみると、漫然と「仲良

し関係づくり」(コミュニティづくり)によってつくられたわけではなかったのです。

薬害裁判で製薬企業は加害者として現れ、公害問題、原発問題、環境問題、物価急騰等を引き起こすのは企業が多かった。その事実を指摘し批判し、場合によっては政府や自治体が仲裁し利害調整をすることで国民、企業、政府の三者の関係はバランスがとれてきた。つまり企業は国民にとって「たたかひの相手」の様相をとるのですが、裁判や行政の仲介をへて、あるいは直接の話し合いを通じて、互いを理解しその存在を認め合うようになって、はじめに「和事」の関係が生まれたのです。

「いい子」になり、いうべきことを自粛して笑顔をつくっても「和事」の関係はつくれないのです。意見は意見として事実をきちんと伝える。歴史をみるとこうしてはじめて「和事」は生み出しされる。これが「荒事」から「和事」の関係へ変化させるポイントではないでしょうか。ここに日本福祉文化学会の存在意義があると思います。

「なにわ文化」は江戸の「荒事」あるいは「武士力による争い」に代替えし、相互批判(言論あるいは民主主義)を通じて生み出されたのが「たおやめぶり」だったのではないかと。講演者が「なにわ文化」は平和主義だというとき、このような趣旨で話をしていたように思います。

戦後1960年—70年代に20年ほどの短期間ですが、わが国においても福祉国家づくりが官民一体となって進められた経過があります。「和事」によって国民福祉の飛躍的發展が進み出したのです。しかしおおよそ1980年から徐々に「荒事」の文化が表にあらわれ、国家的な「和事崩れ」が進められ、現在に至ります。

さてこの時期に私たちは、いうべきことを自粛し笑顔をつくり「仲良し関係づくり」(コミュニティづくり)を進めるつもりなのか、意見は意見として事実をきちんと相手に伝え「和事」の関係を創り直すのか、進路が問われているということでしょう。講演は、このような趣旨であったと記憶します。

講演者の「語り」が、ゆりかごにゆられているような心地で私たちをつつんだものです。

(ながやま まこと 長崎純心大学大学院非常勤)